

景観研究における視点別の系譜と方向性に関する一考察 —1985～1996— *

A Review of studies on Landscape Research and An Examination of the Trends,1985-1996

溝上章志**・柴田 久***

By Shoshi MIZOKAMI and Hisashi SHIBATA

1. はじめに

生活レベルの向上とともに、人々のアメニティへの関心はますます高まりつつある。これに応じて各地の自治体では、これまでの機能性、経済性から精神的豊かさの重要性を認知した、様々な景観整備事業を展開している。一方で、設計マニュアルの安易な使用によるデザインの画一化や、安直な装飾のみに依存した修景整備など、計画者の景観創出に対する思想的かつ方法論的な欠如が指摘されるケースも少なくない。このような事態を回避し、かつ限られた財政の中で効率的な景観整備事業を実現させるためにも、景観研究の成果が還元されるべきであろう。今後の景観研究に対する方向性を探求していく上でも、過去の研究動向を踏まえ、考察することは必須であると考えられる⁽¹⁾。これまでいくつかの有用な景観研究のレビュー論文がまとめられているものの⁽²⁾、景観研究における多様化した研究視点を体系的に分類し系譜図を導出して、その動向を考察した研究は少ない。

本研究では、ここ 10 年来の多岐にわたる景観研究の動向を探り、研究目的という視点からその系譜を導出する。またそれに基づき、先行のレビュー論文も参考にしながら、今後の景観研究が進み得る方向性・発展領域を検討する。

2. 研究手順

(1) 対象論文の選定と内容の整理

系譜を作成するに当たり、土木学会の主要論文集である土木学会論文集、土木計画学研究・講演集、土木計画学研究・論文集と、日本都市計画学会の学

術論文集である日本都市計画学会学術研究論文集および引用文献として建築学会の主要論文集である日本建築学会計画系論文報告集より、1985 年から 1996 年の 12 年間に発表され、景観を主題に扱った論文 263 編を選出した⁽³⁾。それらを掲載誌別、年度別にまとめたものが表-1 である。

選出した各論文の研究内容を把握するため、①タイトル・著者名・掲載誌名、②研究背景および目的、③研究対象、④データ、⑤分析手順、⑥分析手法、⑦結論、⑧課題、⑨参考文献、⑩特記事項、⑪自己評価について内容を整理した。

(2) 論文の分類と系譜の作成

上記項目のうち②

研究背景および目的

に着目して、対象論文を分類、それぞれについて系譜図を作成する。研究目的に着目した理由は、系譜を作成するにあたり分類軸が研究の視点にあること、系統的な研究動向を最も反映させていることの 2 点による。

表-1 対象論文数 (編)

年度	出典論文集名			合計
	土木学会 論文集	土木計画学 研究講演集 ・論文集	日本都市計 画学会学術 研究論文集 等	
'85	2	3	6	11
'86	0	4	4	8
'87	0	3	5	8
'88	0	11	10	21
'89	0	6	7	13
'90	1	7	18	26
'91	1	10	16	27
'92	0	15	13	28
'93	4	12	13	29
'94	0	17	11	28
'95	2	15	16	33
'96	1	14	16	31
合計	11	117	135	263

3. 景観研究における視点とその系譜

(1) 研究視点の把握

住環境における景観を主題に扱った論文を対象に、そのキーワードの抽出・分類より研究動向を考察した景観研究のレビュー論文¹⁾が発表されているが、複数のキーにより一つの論文を分類しているため、結果として一つの論文が複数の分類カテゴリーに所属することとなり、明確な分類が存在せず、

*キーワード: 景観研究, 研究系譜

**正会員 工博 熊本大学工学部環境システム工学科

***学生員 熊本大学大学院土木環境工学専攻

(〒860 熊本市黒髪 2-39-1, TEL096-342-3541, FAX096-342-3507)

系譜という点にまでは至っていない。

本稿ではより体系的な考察を目的とし、選出した論文を図-1に示すような9大分類、32小分類の研究視点に分類した。それぞれの内容について、以下概説する。

- ① 景観デザインのための操作概念の提案…望ましい景観デザインを創出するための操作概念について、定義、検証し、これを景観設計のための基礎資料とするものである。
- ② 景観特性に関する解釈論的研究…人々の景観に対する認知について、原風景、テキスト景観、および既存景観等の特性を把握することで、それらを生かした景観づくりの方向性を探ろうとするものである。
- ③ 景観イメージ論…人々の景観に対するイメージを把握し、人の認知と景観構成要素・景観イメージの連関を解明しようとするものである。
- ④ 景観予測分析…あらかじめ予想される景観をシミュレートすることで、よりよい景観を選出しようとするものである。シミュレーション手法の有効性を検討する研究、コンピューターを用いた総合的シミュレーションシステムを開発しようとする研

究、シミュレートした景観の評価、シミュレートした景観よりデザイン因子を抽出しようとするものに大別される。

- ⑤ 景観評価手法の考案…多様な視点による評価概念・評価モデルの提案、定量的手法の構築、またシーケンス景観評価や住民の評価構造の把握によるアプローチ等、景観計画における実践的かつ的確な評価手法を開発することを主目的とした研究である。
- ⑥ 景観保全・創造のための制度上の提案…国および景観行政先進都市における景観に関する制度・政策等を把握し、その効果を分析することで、今後の景観保全・創造のために行政側のとるべき方向性の提案を行うものである。
- ⑦ 事例研究…実際に行われた、またはこれから行われる景観整備計画を対象とした研究で、整備に対する事前住民意識の調査、計画の概要報告および整備後の評価に大別される。
- ⑧ 評価尺度の特定による景観分析…特定の評価尺度により景観を分析しようとするもので、景観の乱雑さを誘発させる色彩および広告物に着目した研究がある。
- ⑨ 変動要因に関する景観分析…天候、時間等で変動する景観に着目し、その特性を把握することで、景観整備・デザインに有用な基礎的資料を提示しようとするものである。

(2) 系譜図と動向の考察

分類した研究視点ごとに系譜図を作成し、研究の動向を考察する。ここでは紙面の都合により、以下の2視点について記述するに留める。

① 景観デザインのための操作概念の提案

操作概念の提案を行う研究については、いずれも90年代に入って増えてきている。空間単位については、多くが人間の視知覚現象に着眼点を置き、ヒューマンスケール・レベルでの景観の「まとまり」を考慮した景観設計の提唱を行っている^{2),3)}。形態的デザインエレメントについては、明解な動向というものは見受けられないが、対象が多様化しており、それぞれにデザインへの知見として成果が得られている^{4),5),6)}。視点場探索については、眺望景観特性を把握するものや構図的に最適な対象物の「見え」の位置を探る研究^{7),8),9),10)}が多いが、最近では、視点の

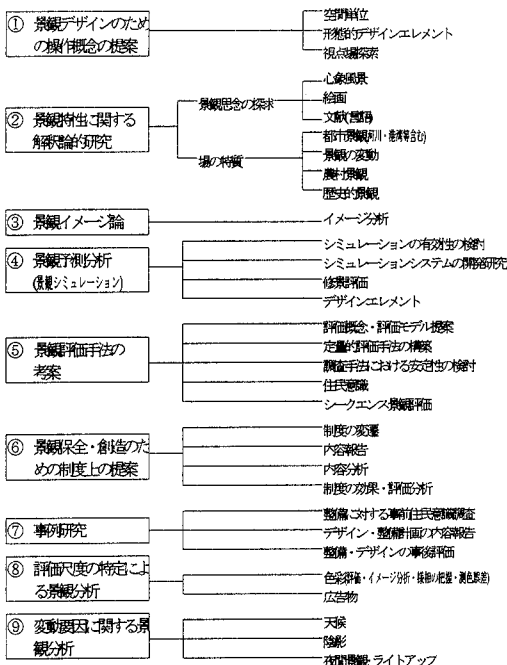


図-1 研究視点

移動に伴う対象物の「見え」の変化を考慮し、その視覚像の特性を生かした街路景観計画への基礎的な方針を提案したもの¹¹⁾や、より操作可能な実践的・物理的指標からの視点場探索手法¹²⁾が提案されている。以上の視点場探索についての系譜図を図-2に示す⁽⁴⁾。

② 景観評価手法の考案

評価概念・評価モデルの提案に関する研究は90年から93年に集中し、96年にも多くの研究が発表されている。90年代前半には物理的な評価尺度を用いた研究^{13), 14), 15), 16)}が多いが、最近では人間の持つ感性と評価を融合した研究¹⁷⁾や、評価と建設費の兼合いに着目する¹⁸⁾など、その観点は多様化している。また定量的評価手法の提案や調査手法における安定性の検討の研究^{19), 20), 21)}は減少傾向にあり、この分野の研究は対象とした85年以前にある程度の成果が得られているものと見受けられる。さらに住民意識からのアプローチとしては、景観整備の差によって生じる住民への影響や²²⁾、住民相互間の意識の相違や^{23), 24)}、意識の表出した行動選好に着目し行動選好と水辺認識との関連性を分析した研究²⁵⁾などが出てきている。シークエンス景観評価については、93年ごろから脳波を試用した景観評価²⁶⁾や、道路の分節化の方法を提案したもの²⁷⁾など多様であり、これまで研究の大半であった構図的景観(シーン)評価に対するあらたな視座を与えようとするものが多い。評価概念・評価モデルの提案についての系譜図を図-3に示す。

4. 総括的考察と研究展望

(1) 研究動向の総括的考察

研究の目的を軸とした、研究視点の把握による景観研究の系譜より、景観研究全般の動向に対する総括的な考察を試みる。現在の景観研究は大別して、設計者視点の研究(景観設計に有用な要素を把握する研究; 図-1における①②⑨)、景観イメージ研究(人々の景観に対するイメージから景観に対する認識を分析する研究; ③)、評価者視点の研究(人々が「良好」とする景観の把握、およびその判断基準の把握を行う研究; ④⑤⑧)、景観形成のための実証的な研究(実際の景観行政、景観計画を対象に検証を行う研究; ⑥⑦)の4つに分類されると考えら

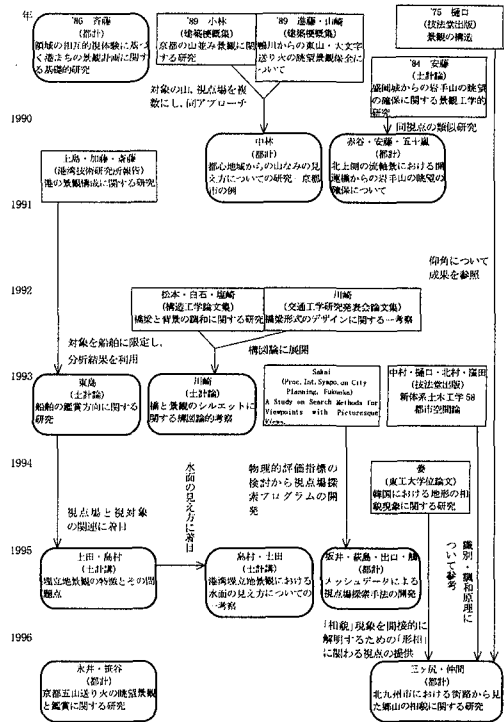


図-2 視点場探索

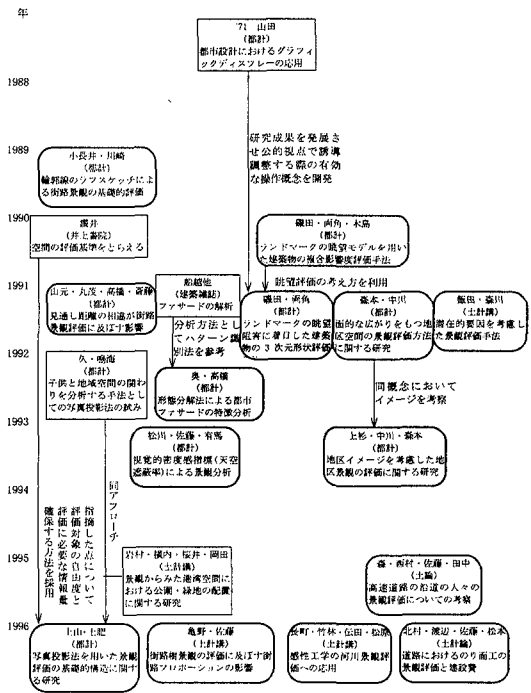


図-3 評価概念・評価モデルの提案

れる。これら4つの研究視点においては、目的上、方向性が相違しているにしても、研究遂行上、それぞれが補足的立場として関与する関係性にあることが系譜図よりも明らかである。例えば、図-3より、評価概念・評価モデルの提案を目的とした上山らの研究²⁸⁾は分析手法について景観特性に関する解釈論的研究の景観思念の探求(心象風景)に分類される文献²⁹⁾、また同研究視点の場の特質(港湾景観)に分類される文献³⁰⁾を参考としている。また研究過程において「イメージ分析」を行っている研究が大半であり、「景観」を視覚的現象から心的現象として捉える方向性は確立されているといえる。しかし、近年、聴覚を契機とする景観体験、サウンドスケープを対象とした研究も数多く存在するなど⁵⁾、その認識は「五感(視覚・聴覚・臭覚・味覚・触覚)」を契機に形成される心的現象、すなわち「アメニティ」に移行しつつあると考えられる。

一方、研究の数が減少傾向にあったのは、調査手法の安定性の検討や評価手法の構築を行う研究である。この分野は景観研究の初期から行われており、これまでにある程度の有用な蓄積が得られている。しかし、景観が視覚契機のものから五感契機のものへとその認識を移行し始めた現在、従来の評価手法では対応しきないケースが表面化してくるであろうことは容易に想像できる。今後は従来のアプローチとは異なるアメニティ評価手法の確立が必要になると思われることから、再びこの分野の研究は盛んになるであろう。

また現行の景観計画が計画者(行政)と評価者(住民)の相対的關係にあるのと同様に、これらに関する研究においても知見の有用性について、設計者側を対象とした操作論的研究と住民側を対象とした評価論的研究とに二分化しているようである。パブリックインボルブメント等のあらたなまちづくりに対する制度・ルールづくりが提唱されつつある現在、二分化した研究視点を統括的に取り上げる景観研究の展開が進められるべきと思われる。

5. おわりに

本稿では、ここ10年来の多岐にわたる景観研究の動向について、多様化した研究視点を体系的に分類、それに基づいた系譜図を作成し、今後の

方向性を検討した。なお系譜図作成においては、見落としや不適切な文献の掲載等の可能性もあることをあらかじめ留意されたい。

補注

- (1) 窪田は「都市計画No.196, pp32-35, 1995」の中で、「まず憂うべき傾向として、近年の研究論文の多くが、過去の論文のレビューを十分に行わない傾向も強めている点があげられる」と指摘している。
- (2) 例えば篠原 修: 景観研究の系譜と展望-風致工学会から景観設計へ、土木学会論文集No.470/IV-20, PP.35-45, 1993, 文献1)等
- (3) 文献の表題と、内容からの研究対象、主目的に景観について取り扱っているかを判断し、選出した。なお今回は視覚を契機に形成される心的現象と景観を捉え、サウンドスケープ等は選出していない。
- (4) 枠内は上から順に「著者名」、「掲載誌名」および「論文タイトル」である。なお、掲載誌名は一部省略している。「土木論」=「土木学会論文集」、「土木計画学研究・講演集」、「土木論」=「土木計画学研究・論文集」、「都市計」=「日本都市計画学会学術研究論文集」、「建築報告集」=「日本建築学会計画系論文報告集」、「建築概観集」=「日本建築学会大会学術講演概観集」また丸型四角形の文献が、選出したものから分類したものであり、角型四角形の文献は系譜として参考とされたものを表記している。
- (5) 例えば小柳武和他: 場と環境者の認識性に関する基礎的研究、土木計画学研究・論文集No.11, 1993 など

参考文献

- 1) 北原理雄: 「住環境と景観」をテーマとした研究の動向に関する一考察 1975~1988年、日本都市計画学会学術研究論文集No.24, pp481-486, 1989 2) 仲間浩一: まちのイメージを形成する空間単位の相とそのデザイン手法に関する研究-国会資料の分析を通じて-, 日本都市計画学会学術論文講演集, pp709-714, 1992 3) 大山勲・花岡利幸・北村真一: 伝統的集落における道路空間の視覚的分断の特徴、土木計画学研究・論文集No.13, pp469-478, 1996 4) 渡辺直幸・佐藤俊明・北村真一・皆川勝子: コンクリートブロック積み擁壁のデザインに関する一考察、土木計画学研究・講演集No.14(1), pp761-766, 1991 5) 川崎雅史・南谷隆: 広場のデザインに関する研究-広場と環境との接点を探るため-, 土木計画学研究・講演集No.17, pp355-358, 1995 6) 大塚健之・小林正美: 清掃工場のデザインの推移と現状に関する調査研究、日本都市計画学会学術研究論文集, pp619-624, 1996 7) 中村哲: 都市地域からの山なみの見え方についての研究-日本都市計画学会-, 日本都市計画学会学術研究論文集, pp613-618, 1990 8) 川崎雅史: 橋と景観のシルエットに関する構図論的考察、土木計画学研究・論文集No.11, pp153-160, 1993 9) 島村桂子・土田孝: 港湾埋立地景観における水面の見え方についての考察、土木計画学研究・論文集No.17, pp1103-1106, 1995 10) 永井正吾・笹谷康之: 京都五山送り火の眺望景観と鑑賞に関する研究、日本都市計画学会学術研究論文集, pp637-642, 1996 11) 三ヶ尻裕司・仲間浩一: 北九州市における街路から見た都市の相関性に関する研究、日本都市計画学会学術研究論文集, pp607-612, 1996 12) 坂井猛・萩島哲・出口敦・嶋治: メッセンジャーズによる視点探索手法の開発、日本都市計画学会学術研究論文集, pp253-258, 1995 13) 磯田新子・両角光男: ランドマークの眺望阻害に着目した建築物の3次元形状評価手法-市街地整備への運用方法とその評価-, 日本都市計画学会学術研究論文集, pp421-426, 1991 14) 山元英敬・丸茂弘幸・高橋昭子・斎藤憲治: 見通し距離の相違が街路景観評価に及ぼす影響、日本都市計画学会学術研究論文集, pp817-822, 1991 15) 奥成信・高橋雅俊: 形態分解法による都市ファサードの特徴分析、日本都市計画学会学術研究論文集, pp733-738, 1992 16) 松川賢治・佐藤誠治・有馬隆次: 視覚的密度感指標(天空遮蔽率)による景観分析、日本都市計画学会学術研究論文集, pp517-522, 1993 17) 長野三生・竹林征三・伝田正利・松原行宏: 感性工学の河川環境評価への影響、土木計画学研究・講演集No.19(1), pp297-300, 1996 18) 北村真一・渡辺直幸・佐藤俊明・松本聡子: 道路におけるのり面工の景観評価と建設費、土木計画学研究・論文集No.13, pp439-445, 1996 19) 西岡秀三・原科幸彦: スライド写真を用いた一般市民による街並み評価法に関する研究、日本都市計画学会学術研究論文集, pp373-378, 1985 20) 田島学・朝倉博樹: 景観提示方法による街路景観評価実験に関する比較研究、日本都市計画学会学術研究論文集, pp385-390, 1985 21) 三宅良司・榎原和彦・土橋正彦・為岡おさる: 景観評価実験における被験者数と評価の安定性に関する一考察、土木計画学研究・講演集No.15(1), pp995-1002, 1992 22) 窪田陽一・山崎啓子: 街路景観の認知と評価に関する一考察、土木計画学研究・講演集No.11, pp347-354, 1988 23) 安藤昭・五十嵐日出夫・赤谷隆一: 日本の都市の個性創出のための日独地方都市の都市景観の比較-盛岡とゲルムシュタットを対象として-, 土木学会論文集(7月), pp.67-76, 1991 24) 須賀伸介・大井敏・原沢英夫: 自由連想調査とクラスター分析による水辺に対する住民意識の研究、土木学会論文集(1月), pp91-100, 1993 25) 高橋邦夫・清水丞・萩原良巳・酒井彰・中村彰吾: 水辺計画策定のための調査プロセスに関する研究、土木計画学研究・講演集No.17, pp295-298, 1995 26) 深堀清隆・窪田陽一: 簡易型臨場測定装置による高速道路走行景観の分析、土木計画学研究・講演集No.16(1), pp511-518 27) 祝原唯史・北村真一・花岡利幸: シークエンス景観から見た道路ネットワークの分析、土木計画学研究・講演集No.17, pp407-410, 1995 28) 上山輝・土肥博至: 写真投影法を用いた景観評価の基礎的構造に関する研究、日本都市計画学会学術研究論文集, pp595-600, 1996 29) 久隆治・鳴海邦頼: 子どもと地域空間の関わりを分析する手法としての写真投影法、日本都市計画学会学術研究論文集, pp715-720, 1992 30) 岩村恒・横内憲久・松井眞一・岡田智秀: 景観からみた港湾空間における公園・緑地の配置に関する研究、土木計画学研究・講演集No.18, pp685-688, 1995